

## #1 KIITO：都市の記憶、場のデザイン —未完を楽しむ港町のリノベーション—

ゲスト : 永田宏和氏、本田亙氏、高濱史子氏

レポート : 青木嵩(関西学院大学)

写真 : 檜侑子

都市空間のつくり方研究会が主催する都市空間のレシピ#1 では、デザイン都市神戸を象徴する“KIITO”を取り上げました。神戸で長いこと過ごしたことがある身としては、この度のレポート作成を任せてもらえたことに大変うれしく思います。この度の連続座論は、複数の観点から KIITO の“空間的魅力”と“今後の可能性”を見つけ出そうというものでした。しかしながら登壇者の方々の発表およびクロストークのどちらにおいても、それぞれの観点から出てくる意見や要素が表出するだけであり、これといった結論が見つかったとは言えません。その為、受け取る側によってとらえ方は様々であったと思います。故にこのレポートでは、感想とともにあくまで主観的に各登壇者の話から見られた KIITO の“魅力”と“可能性”に関してまとめさせていただきます。



KIITO 館内

### —魅力の創出—

KIITO という空間の魅力とは何か。あるいはどこから来るのか。今回のレシピ#1 を通し、「余白」と「協創」というキーワードが「継続」されていることに意味があるのではないかと感じました。「余白」とは、本田氏がトークセッションの際に出された言葉です。「協創」に関しては、特別にキーワードとして出てきたわけではありませんが、登壇者の方々の話で共通していた部分だと思います。そして、そのどちらもが KIITO の検討段階から大切にされ、現在でも引き継がれて実行されている点が重要なのではないのでしょうか。



本田亙氏

連続座論の一環として、まず初めに KIITO 内覧会がありました。その際、まだ手を付けられていないスペースが KIITO 内の至るところで見受けられました。KIITO を創り上げる際に残された余白です。また、KIITO 完成時には余白であった空間が、少しずつ変化している様子も見ることができました。KIITO 内部を歩くことで、KIITO が作られ、余白としての箱から、行政を含めた多様な人々の手が加わり変化していく過程、そして作られた姿に出会うことができます。そうして作られた空間は、下手に統一されたハコモノではないように思えました。各余白の創作に携わった人々からしたら、思い入れがある場となります。そうでないにしても、KIITO 内部のそれぞれの空間で違いを見つけることができ、好みにあった空間を見つけることができます。事実、トークセッションでは、廊下が好きである人もいれば、普段賑やかにワークショップを行っているホールが時折静かな時が好ましいという意見も伺えました。



内覧会の様子

連続座論では、それら“余白”も単に残されるのではなく、少しずつ周りの環境に沿うように埋めていかれる意向が聞けました。そして、その過程で“協創”というワードが大切にされているように感じます。この“協創”には、空間構成のみではなく、現存する空間の活用方法、そして KIITO を発信源あるいは中心とした社会に対する Design まで含まれています。これらは、KIITO 内部の移り変わりからも感じられます。また、トークセッションでは、永田氏が他セッションとのコラボレーションによる KIITO の活用及び、KIITO の活用法に幅を作ることを重視している旨を話してくれました。



永田宏和氏

KIITO は、構想段階から行政以外の手が加わることを想定し、余白を残してきました。そうした考えのもと 1 年以上が経つ現在でもそれら 2 点に対するアプローチは大切にされています。そのため、行政等の企画に乗っかるだけの参画ではなく、参画した結果として KIITO そのものに形として反映されていく空間が魅力を創出しているのではないのでしょうか。そして、一度訪れた場合でも、KIITO は変遷の上にあるため、訪れる度に空間的、ない質的変化が見受けられる、そして自分が好きな空間も増えたり変わったりすることが、私たちが魅了する要因だと思います。

## —表出する可能性—

KIITOは、完成からまだ1年程しか経っていないため発展途上であると言えます。今回行われたレシピ#1では、異なる視点から複数の“今後の可能性”を垣間見ることができました。永田氏が語られたKIITOの活動の核とも言える「クリエイティブゼミ」では、行政の各部局との連携が確立しています。また、ここで提案されたものの多くは実行に移されているため、「先進事例」としてリノベーションやまちづくりを必要とする人々の指針に成れます。さらには本田氏が語る「余白」は、上記の“魅力”であると同時に、“可能性”であるのではないのでしょうか。時代の流れや地域市民のニーズに合わせながら少しずつ完成させていくスタイルは、その場所の使用目的等が定まっていないため、その時々解釈に合わせて姿を変える可能性を十分に秘めていると思います。また、高濱氏の話の中では、日本ではあまり見られないオフィス空間を所有している点も挙げられていました。その点は、魅力として列挙されていました。しかしながら、同時にKIITOを活用する入居者層が多様化する可能性を見出すこともできると思います。KIITOをオフィスとして活用する人々の視点(KIITOに見出す魅力)が異なり、そのような人たちのカラーがKIITOにあふれ始めた場合KIITOのさらなる活用方法や連携の可能性が見えてくるのではないのでしょうか。



高濱史子氏

## —結び—

KIITOの空間的魅力は、目的意識が大切に引き継がれている部分も大きいですが、それと同様に、未完だからこそその参加可能性と、今後の展望性が大きく影響しているのではないのでしょうか。そして少ない活動においても、実施へと移していく過程は、同様の社会を目指す人々に希望を感じさせる要素となります。KIITOにおいては、「余白」が魅力と可能性を結び付け、持続させる重要なファクターであると思いました。

「余白」をファクターとした場合、数十年後のKIITOまで見通すのであれば、どのような問題が考えられるのでしょうか。何よりも大きいのは、「余白がなくなった場合」だと思います。年数が経つ毎にKIITO内部の「余白」は少なくなっていくはずですが。その場合は、「何を余白とするのか」という問にぶつかるように思います。だいぶ前に使われた空間を改めて余白に戻すのか、プログラムによる空間の活用法を余白とするのか、それとも時間という概念から見て昔の使い方との違いを余白とするのか…

この度の連続座論は、そのように現在のKIITOのみを見渡すのではなく、一市民ながらもKIITOの将来まで見通したくなる…そのようなイベントでした。KIITOと異なる接点を持つ3人の登壇者の話は、私自身がKIITOを活用した際の状況をイメージさせ、クロストークでは、KIITOの今後を考えさせられる、本当に“魅力”と“可能性”を考えさせる時間だったと思います。今後、レシピ#2、#3と続くと思います。その先駆けに#1でKIITOを取り上げた結果として、よい都市空間を「これから作る」というスタート地点を意識する場となり、「余白」というヒントを得られたのではないのでしょうか。



クロストークの様子

稚拙な文章ではありますが、私が当日の都市空間のレシピ#1 で感じ、学び取ったことは以上となります。今後のイベントにおいてもまた異なる都市空間の要素を発見できることを楽しみにしています。ありがとうございました。